

京都・伏見の酒蔵地域における 観光と日常の共存を促す滞在空間の設計

高知工科大学 システム工学群 建築・都市デザイン専攻

目黒 智鑫

指導教官 重山 陽一郎

① 研究テーマ（問題提起）

京都では観光地化の進行により、観光客が立ち止まり滞在できる空間が少なく、観光行動は通過型となっている。さらに、住民が日常的に利用する空間と分断されており、地域との関わりが生まれにくい状況が生じている。

② 目的

本設計は、文化的背景を有する地域において滞在空間を創出し、観光と日常が無理なく重なり合う空間を提案することを目的とする。到着・待機・日常利用といった行為が同じ場で成立する状態を、観光客と住民の関わりが生まれる状況として捉える。

③ 対象地

対象地として京都市伏見酒蔵地域を選定した。本地域では、観光ルートと住民の生活動線が分断されている(図1)。また、酒蔵や木造建築が多く残り、地域文化を活かした設計が望まれる。



図1：敷地周辺状況(国土地理院航空写真に筆者加筆)

④対象地の現地と課題

伏見の水辺空間には次の三つの課題がある。

① 駐車場および舟乗り場（簡易テント）による景観の質の低下(図2)

月桂冠大倉記念館に近接する駐車場であり、現在は観光客しか利用せず、駐車場としての機能で歴史的景観を損ねている。

② 観光エリアと住民エリアの分断

③ 弁天橋付近の混雑と滞在空間の不足(図3)

観光客と住民の動線が交錯し、通過・鑑賞・滞在接受し止める空間が不足している。



図2：月桂冠大倉記念館付近の駐車場の現状をCGで再現

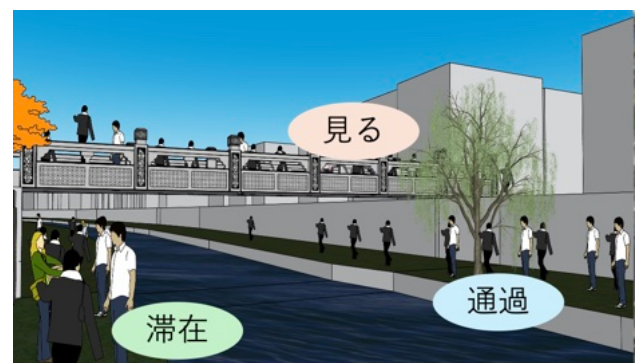


図3：弁天橋周辺の様子をCGで再現

卒業設計概要

⑤ 課題の解決方針

本設計では、性格の異なる二つの敷地にそれぞれ役割を与え、観光と日常が段階的につながる空間構成を行った。各敷地において、観光客と住民の行為・動線の関係を整理し、同じ場を共有しながらも無理なく共存できる状態を目指した。

⑤-1 敷地1：観光到着動線と住民生活動線の重なり

敷地1は、月桂冠大倉記念館に近接する既存駐車場であり、従来は観光客の到着動線としてのみ機能していた。本計画ではこれを「導入の場」と位置付け、観光客の動線に加えて、隣接する住民エリアからの生活動線を受け入れる構成とした。幼稚園側に新たな入口を設けることで、住民が日常的に敷地を通過し、観光客と同じ広場を共有する関係を生み出している(図4)。通過と滞在が同時に成立する中間的な場とすることで、観光と日常が自然に重なり合う状態を目指した。

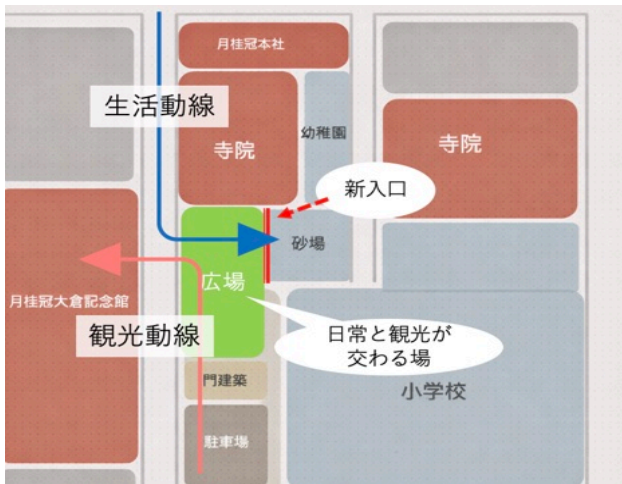


図4：観光客の動線(赤) /住民の動線(青)



図5：広場の様子

⑤-2 敷地2：観光動線と散歩動線の同時成立

敷地2は、舟乗り場や弁天橋に近接し、観光客の待

機・景観鑑賞と、住民の散歩動線が集中する場所である。本計画では、これらの動線を分離せず、異なる行為が同時に成立する空間として受け止めることを方針とした(図6)。観光客の滞在と住民の日常的な散歩が交錯しながらも衝突しない関係をつくることで、水辺における滞在空間の不足という課題の解決を図る。

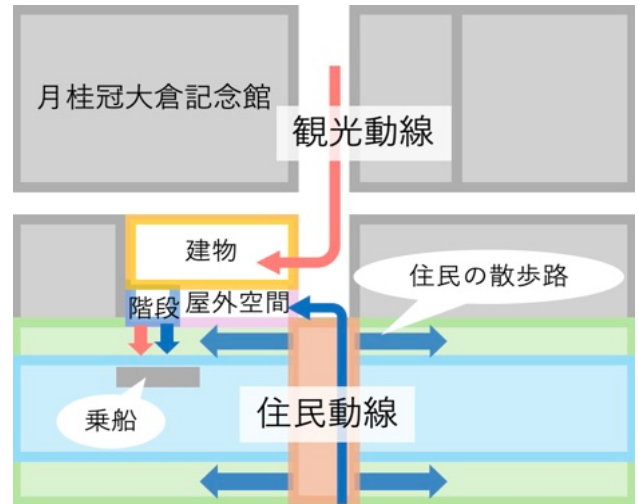


図6：敷地2の周辺動線

⑥設計

⑥-1 敷地1：空間構成と操作

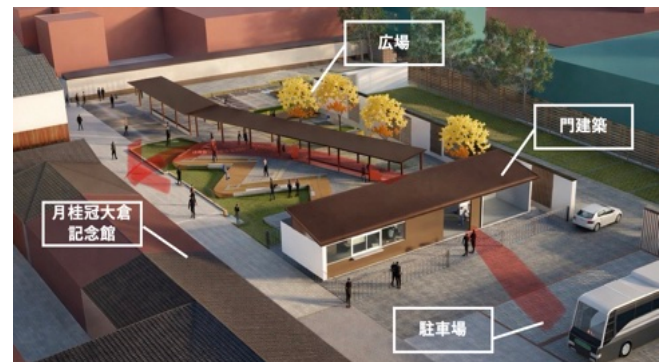


図7：敷地1の設計全体

敷地1では、月桂冠大倉記念館向かいに位置する駐車場を対象に、観光の起点であると同時に、地域の日常動線とも重なる「広場」を計画した。広場は、**駐車場 → 門建築 → 広場 → 月桂冠大倉記念館・地域**という段階的な空間構成の中核として位置づけている(図7)。駐車場と広場の間には門建築を配置し、大開口を設けることで、到着した瞬間から広場の存在が視認できる構成とした。これにより、観光客は自然と建築を

卒業設計概要

通過し、広場へと導かれる体験を得る。一方で、広場には幼稚園からの新たな地域動線を引き込み、住民が日常的に立ち寄れる場として計画している。

広場内部には、利用者や行為の違いに応じて性格の異なる空間を配置した(図8)。月桂冠大倉記念館側には、歩きながら滞在できるクネクネとしたウッドデッキを設け、散歩や短時間の休憩を受け止める場とした(図9)。駐車場側には、観光客が待ち時間を長く過ごせる待機空間を配置し、団体利用にも対応している(図10)。また、幼稚園側には水の広場を設け、子どもの水遊びと伏見の酒文化における「水」の存在を重ね合わせて表現した。



図8：広場全体



図9：月桂冠大倉記念館側の広場の様子



図10：駐車場側の広場の様子

このように広場を一様な空間とせず、複数の居場所を内包させることで、観光客の休憩や待ち時間の滞在と、住民の散歩や立ち寄りといった日常行為が、同じ場所で重なりながらも無理なく共存する中間領域として機能することを意図している。



図11：設計後空間イメージ

⑥-2 敷地2：配置・断面・立体構成

敷地2では、水辺における滞在と通過を両立させるため、高低差と視線関係を活かした配置計画とした(図17)。

敷地2は高低差があり、川沿いを散歩する人の視線は下から建築を見上げる関係となる。そのため、建築を川から離して配置し、散歩路に対する圧迫感を軽減している(図12、13)。



図12：川下からの視点

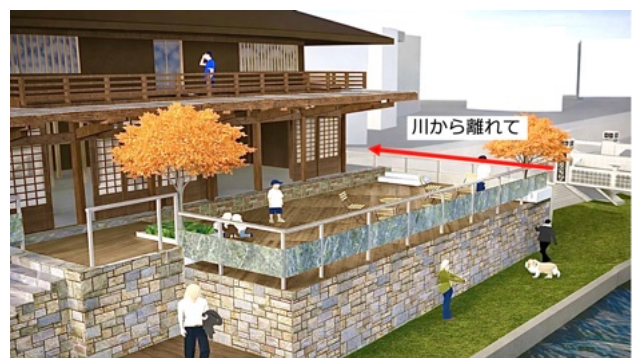


図13：川から離す配置

卒業設計概要

さらに、川と建築の間の開けた空間は床レベル 45cm 下げて構成し、腰掛けや立ち止まりを促すことで、通過空間を滞在空間へと転換している（図 14）。



図 14：腰をかける様子

建築は二層構成とし、1階に船乗り場の待合や散歩路と連続する半屋外空間、2階に川や橋を見渡す視点場を設け、地上の活動と水辺の風景を立体的につないでいる（図 15・16）。



図 15：2階の眺め



図 16：2階の眺め

⑦ 参考文献

- 1)京町家について：京都市景観・まちづくりセンター
(https://machi.hitomachi-kyoto.jp/machiya_j/about?utm_source=chatgpt.com)
- 2)京と大阪をつなぐ港町・伏見：京都の文化遺産
(<https://kyoto-bunkaisan.city.kyoto.lg.jp/kyotoisan/nintei-theme/fushimi.html>)



図 17：敷地 2 の全体の様子